

の当番で船で上海の第二戦犯管理所まで行きました。それから中国軍が大目に見てくれたのか、使役（労働）は全くありませんでした。

八月下旬ごろか、中国軍の収容所長（少将ぐらいか）が戦犯容疑者を全員呼び出して訓示をしました。それは、君達に寛大な処置をするというものでした。私は上等兵だったので九月十日ごろ収容所を出て、上海から海防艦で佐世保入港、家に帰ったのは十二日ごろだったと記憶しています。

憲兵の軍曹以上は全員戦犯容疑で残されたのですが、私は収容所で手伝いをしていたので帰還が遅れたのです。憲兵でもひどい目に会った人、優遇・寛大にされた人とさまざまでしたが、私は第七旅団長生田寅雄少将から過分の感謝状を頂き、帰国時は感謝状や記念写真等検査もなく、衣服等も持って帰還できました。

憲兵は相当睨まれていたり、軍人はかりでなく、現地治安、情報収集などのため諜報活動した人もおり、岐阜県の人でも戦争犯罪人となることを恐れて自殺したり、病人と偽り、船で揚子江を下ろうとして見つかり、逮捕

された人もいました。

私は幸運にも、むしろ感謝されながら復員できましたし、持ち帰った写真をもとに戦友を捜して、戦友会の発起人となって、もう十一回開催しています。何事も一生懸命真面目にやるという信条は軍隊で築かれたものでした。

湘桂作戦舟を曳いて溯る

愛知県 石井 孝

私は大正十年生まれですから、昭和十六年徴集ということになるのだが、昭和十七年八月、福岡の西部四十六部隊、今の平和台球場の所ですが、八月補充兵として入隊しました。教育を受けずに直ぐ出発です。

船に乗って何処へ行くか判らん。海の水が濁っておれば支那に行くんだという。海と河との間が泥水だわ、そこは珠江で、河を遡っていく。廣東に着いて、本部は東山という所であって、東山から西村という所の野戦倉庫

に転属になりました。

軍の野戦倉庫への派遣です。西村転属とは鳳師団の管轄になることです。波八千六百三十二部隊が部隊名です。実際には軍の貨物廠ですね。

倉庫にはいろんな物があります。将校がいろいろ頼みにくる。また、帽子を失くしたとか、いろんな人がいろんな物を頼みに来た。一番いい所だが、作戦に出たら大変だ。

作戦に出たら西江を舟で溯るのですが、これが大変でした。私たちの隊は、荷物を小さい舟に積んで、それをロープで曳いていくのです。湘桂作戦中は全部このやり方です。

西村という所は広東の北西の郊外です。広東に流れている珠江の西上流の三水とか仏山とかが鳳師団の駐留地でした。南船北馬といわれるとおり、広東デルタ地帯は、河やクリークが縦横に流れているのです。大きな橋といえば広東市街中央から河南地区に通じている海珠橋ぐらいで、他は仮橋が多く、輸送は殆ど船で、珠江には蛋民という水上暮らしの人たちが居るわけです。

作戦が始まれば、野戦倉庫は品物を積んで西江を溯るわけだが、大きい船や汽船は敵機に攻撃され、たちまち沈められるから、小さい舟を集めた。しかし、急流となるから漕いでは溯れない。南支ではロープを岸から引っぱって溯るのです。

結局、それにならって輸送を開始しました。たしか、下流の方の仏山あたりから出発したと記憶しています。ロープは麻でも藤でもない。竹の表皮を縄の様に編んで細いのが、太く編んだのもあり、舟を引っ張るには太いのを何本も用意しました。

その縄を舟の軸に縛り、三人の兵隊が肩に担いで曳いていく。舟の中での舵取りは居ない。われわれ兵隊だけでやるのだ。現地の人には空襲の時逃げたりしてしまうからで、たとえ苦しくても我々だけでやる。

舟と舟の間隔は百ぐらい、一船団は十五隻ぐらいだったか、一個小隊というか、一個分隊か約五十人程度だった。作戦部隊は西江の北側の道を梧州へ、桂平へ、柳州へと進撃していく。我々は北の岸をつたわって舟を曳き上げて行く。

河も川岸も、平らかな、なだらかなものではない。両方に岩があり、水がこう来て、こう来て曲がりくねっている。河が唯、滔々と流れているのではなく、とにかく、くねっている。或る所は澗のようなのだが、崖が切り立って迫っている。兵隊が歩く足場もない。或る所は一尺以上も落差のある所もある。

それでも岸を伝わって、足を踏みしめながら懸命に、綱を肩にかけて曳き上げる。舵取りが乗っていないから岩にぶち当たれば綱をゆるめてそれをかわす。そのうちに敵機が必ず来襲する。P51の定期便が日に何回かは来て、水面すれすれ超低空で掃射する。弾が体のどこに当たっても、口径が大きいから出血多量で死んでしまう。肉も骨ももぎ取られてしまう。これは、実際にやった人間ではないと判らない。湘桂作戦は柳州近くまで行ったと思うけれど、それから下って、反対側の方、増城の方へ行った。

南支へ来ての初年兵教育、苦労話といったら本当に苦勞しました。全部は覚えていませんが、私の所は九州の部隊でしょ、初年兵一か月の教育を受ける時は、小隊長

が駈足行軍をやる、広東の夏でしょ、ものすごく暑くて、道路のアスファルトに軍靴の跡が付く。それを走って行って広東神社の階段を登って、また降りて部隊まで帰る。落伍すると、皆の前で物凄いいんタの連続です。よく続いたと思う。九州の人達だからひどいもんだよ。

湘桂作戦の後、南支では韶関作戦とか、粵漢打通作戦があった。その後は陸豊、海豊作戦というのが連続してあったのですが、増城の方へ行った。あの時は各兵团が行ったり来たりで、満州の方から来た部隊は背のうの蓋も無い。靴を履いていない、支那靴の者もいるし可哀そうだった。

昭和十九年、満州から歩いて来た。もう歩けぬ人は馬の尻尾を握って歩いている。落伍すれば殺されるか、行方不明者になる。或いは逃亡者扱いにされてしまう。

しかし、自分だけで精一杯だから、人のことはかまっていられない。我々の部隊でも落伍した人がいた。戦後帰って来た人もいる。中国の軍隊に入って兵が下士官に下士官が将校になったのも実際いたようです。

軍隊で、作戦で大切なのは行軍に強いことでした。剣

術も射撃も重要だけれど、やはり行軍に強いことが最も重要でした。訓練が辛いというが、「血に代えるに汗を以てする」とか「愛の鞭」ということでしょう。只、感情的な私的制裁は人間的にも許すべきでなく、軍紀を乱すものなので私も軍隊では相当荒いことをやったが、愛情をもってやったつもりです。私は長崎出身で、長崎、福岡、佐賀の戦友や後輩が多いものですから、毎年五月、三県持ち廻りで戦友会を開いている。波八千六百三十二部隊の連中ばかりです。皆、私に来てくれと呼んでくれるし、空港まで迎えにも来てくれて、戦友愛に感謝しています。

南支派遣純兵団の戦闘の裏で

福岡県 田中 稔

私は昭和十七年六月一日教育召集により東京都世田谷区陸軍自動車学校練習隊に入隊しました。入隊前の状況は、新潟県長岡市に在住し召集と同時に本籍福岡県に帰

宅、再度東京へ出発し長い汽車の旅でした。家族では、両親と妹三人弟一人で、長兄は満州へ出兵、次兄は昭和十四年ノモハン事件にて戦死、と云う状況の中で出征しました。

入隊と同時に待っていたのは、軍人勅諭でも内務班のビンタでもない朝から夜まで油と汗にまみれて、自動車の修理、整備です。全然知識がなく本を読んでも、外国語は日本語に変えねばならず、設備は悪くて人力でエンジン等重量物の取り外し、取り付け、危険と一緒に作業をしている状態でありました。六か月間、油の臭う手で箸を持つ、全く辛苦の言葉が其の儘当てはまるものでした。教育終了後、十七年十二月一日、兵技一等兵と同時に引続き召集。久留米第五十一部隊へ転属、五十日余り箒と塵取りを持った掃除兵であった。

昭和十八年一月二十五日、独立混成第二十三旅団司令部へ転属となり、同年兵二人で出発した。途中、博多駅にて母と十三才の弟との別れが、何とも言えぬ別れでした。

一月二十六日門司港発。一月三十日台湾高雄着、二月